

# 植物生育調節剤による温州ミカンの生育抑制に関する研究

## 第1報 秋芽抑制と翌年の着果について

時 任 俊 広 ・ 新 沢 達 郎

(鹿児島県果樹試験場)

TOKITO, T., and NIIZAWA, T.

Studies on the Growth Regulation of the Satsuma Orange Trees by the Plant-Growth Regulators.

(I) On the Retardation of the Fall Shoot Regrowth and Fruit Setting in the Following Year

平坦地の若木は樹勢がおう盛で夏秋梢の発生が多く、特に黒色火山灰土壌の温州ミカンは、10月中旬まで秋芽の発生がみられる。秋芽の抑制が翌年の花つき、着果におよぼす影響について調査を行なった。

### (1) 試 験 方 法

供試薬剤、Bナイン、N A A、MH-30を普通温州7年生で着果量が少なく、秋芽の発生が多いと思われる樹を選び、1樹当り2ℓを夏芽の伸長停止期に散布した。

### (2) 結果および考察

秋芽の抑制効果は、Bナイン、N A A、MH-30ともに抑制効果がみられ、MH-30は5,000ppmで秋

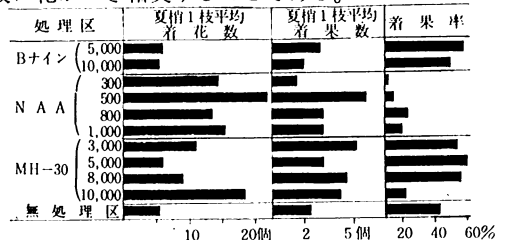
第1表 秋芽の抑制効果

調査項目		1樹平均発生数	1枝平均伸長量
処理区	ppm	本	cm
Bナイン	5,000	31.0	24.0
	10,000	49.3	21.9
N A A	300	14.3	14.9
	500	7.0	13.2
	800	1.3	5.0
	1,000	0.3	2.1
MH-30	3,000	12.0	8.7
	5,000	0	0
	8,000	0	0
	10,000	0	0
無処理区		58.3	17.1
L.S.D	5%	2.35	NS
	1%	3.37	-

芽の発生を完全ににおさえた。秋芽の発生は着果量との関連が深い、無処理は着果量が多いにもかかわらず発芽、伸長量ともに多かったが、N A Aの500ppm以上、MH-30では、5,000ppm以上の高濃度区

は着果量の多少に関係なく秋芽の発生がなく、発芽抑制の効果が認められた。N A AとMH-30は、秋芽の伸長抑制の効果も認められた。果実への影響については着色をみたが、Bナイン、MH-30は影響がなく無処理と同等の着色を示しN A Aは着色を悪くした。散布濃度による着色の濃淡、遅延については、各薬剤とも影響はなかった。

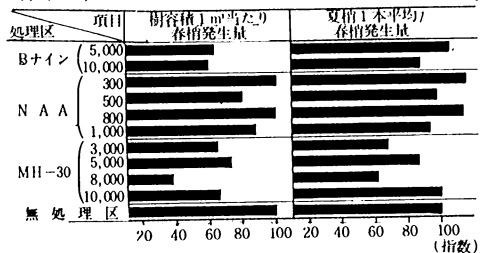
秋芽抑制の処理をした夏梢の翌年の着花と結実については、1樹より10枚を設定して調査した。Bナインは無処理と差はないが、MH-30、N A Aは着花量が多く、特にN A A区は多い。しかし濃度による差は認められなかった。MH-30区はN A A区より着花量は少ないが、着果率が高く夏梢の着果量に差はなかった。樹容積1㎡当りの着果量もN A A、MH-30区は多く、秋芽抑制による着果数増加の効果が認められたが濃度による差はなかった。また秋芽の発生が抑制された夏梢の特徴は、直立した強い枝に花がつき結実することである。



第1図 夏梢の着果と結実

春梢の発生状況は、樹容積1㎡当りの発生本数はMH-30区は少なく、夏梢からの発生数も少ない。春梢の発生量と着花量との関係もみられないことからして、MH-30の影響と考えられる。なおN A A、MH-30区とも処理濃度と春芽の発生量、および伸長量に差は認められなかった。

各薬剤、処理濃度による薬害は認めなかった。



第2図 春梢の発生量